奈文研ニュース

No.22 Sep.2006

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp/

白虎特別展示の回顧

あの何とも言えない喧噪(けんそう)が去ってはや３ヵ月が過ぎました。飛鳥資料館始まって以来のお客様をお迎えするとともに、多くの関係諸機関にご協力をいただき、かつてない激動の数ヶ月間を過ごしました。ここにその一端をご紹介したいと思います。

飛鳥資料館でキトラ古墳のはぎ取られた壁画を展示することは、去年の秋から各方面での検討がおこなわれ、最終的には年明けから徐々に現実味を帯びて話されるようになりました。しかし最終的に実施と体制が決まったのが３月に入ってからであったため、準備の期間がなく、関係する方々にいろいろとご迷惑をかけることになりました。

３月上旬に準備のための会合を開き、３月16日にマスコミ発表をおこなって具体的な準備に入りました。まずケースです。今回のケースは、湿度を60%に保つために気密性が高く、ケース内部で空気が循環する設計となっています。照明も極力照度を落とし、約60ルクスとしました。展示会場に関しては、地下の特別展示室では多数の来館者に対応する導線がとりにくいことから、講堂を改装してそこに壁画と石室模型を置くことが決まりました。しかし、高めの設計になったケースを、どのように見せるのかが課題となりました。結局、車椅子用も兼ねたスロープとお立ち台を急遽製作して対応しました(写真)。駐車場対策は明日香村文化財課のご協力を得て、飛鳥資料館前の駐車場を借りるとともに、土日は桜井市の県立農業大学校の構内をお借りすることができました。交通対策では奈良県警の橿原署と桜井署のご指導のもと、飛鳥資料館前の県道にコーンを多数設置することにより、違法駐車対策としました。

白虎特別展示(平成18年５月11日～28日)

こうした準備の後、５月10日に奈良県警の自動車警ら隊のご協力を得て、白虎を奈良文化財研究所保存科学棟から飛鳥資料館まで運搬しました。翌11日は朝９時から明日香村民特別公開をおこない、２時からテープカットと式典の後、内覧会をおこないました。夜になってからはテレビ朝日、報道ステーションの生中継もあり、この日は大変長い一日となりました。その後28日までの17日間で計60,018人のお客様の来館を得、大成功のうちに特別陳列を終了することができました。

おおむね順調な展示だったとはいえ、いくつかの反省点が残されました。まず展示の仕方です。ケースの構造がやや腰高だったこともあり、手前方向からスロープを登っていただき、正面上方からのぞき込む展観方法をとりましたが、やはりお一人の観覧時間が制限された点は多くの方からご指摘をいただきました。それほど大きくない平置きの展示品を、多くの方に見てもらおうとした場合に、ある程度やむをえない方法かと思い実施しましたが、検討の必要があると感じました。また多くのお客様に長時間お待ちいただくことへの対策も、事前にいろいろと検討したのですが、今後に残された課題です。交通関係は比較的順調でしたが、やはり休日とそれ以外の日では対応が異なっており、とまどわれたお客様も多かったようです。とはいえ、大きな混乱もなく終了することができましたこと、館員一同皆様のご協力に感謝申し上げます。（飛鳥資料館　杉山 洋）

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東第四堂の調査（飛鳥藤原第142次）

都城発掘調査部では、藤原宮中枢部の構造を解明するために大極殿院・朝堂院の発掘調査を続けています。前号でも紹介したとおり、今年度は朝堂院の東西に６棟ずつ並ぶ建物のうち、最南の南北棟である東第四堂の調査をおこなっています。５月は例年よりも雨が多かったものの、一転して６月は晴天に恵まれ、調査は順調に進みました。７月前半には東第四堂の南半部のほか、朝堂院を取り囲む東面回廊の一部まで拡張して調査を終えました。

東第四堂の南半部は後世の耕作によって建物の基壇の高まりも残らないほど削平されていました。しかし、礎石を据えるための穴に石が詰められた状況や、建物を解体する際の足場穴を確認し、東第四堂の規模が推定できました。また、以前の東第三堂の発掘調査では、最も東側の５列目の柱穴を建設途中で埋めてしまうという設計変更が確認されました。しかし、今回の東第四堂ではそのような痕跡が認められず、北半の調査に課題を残しました。さらに、東第四堂の東側には、東第二堂や東第六堂などで確認できた造営段階の排水溝がありません。これらの調査所見から、建物を建てる順番や造営前の地形などによって、それぞれの朝堂で施工方法が異なっていたと推測できます。

東面回廊の残存状況も朝堂の南半部と同様、あまり良くありません。基壇の高まりや礎石の据付痕跡は残っていませんでした。ただし、回廊の内側では雨落溝を、外側では雨落溝に先行して掘られた下層溝を確認し、回廊の位置と幅を確定できました。さらに、回廊の外側では完成時に埋め立てられる大規模な溝を確認しました。今回の調査区の南隣に位置する第128次調査では、この溝から5000点以上の木簡が出土しています。今回も木簡出土を期待しましたが、残念ながら削屑木簡が１点出土したのみです。

私にとって今回がはじめての藤原宮跡の調査担当でした。耕作溝の深さや整地土と地山の判別の難しさなど、これまで調査してきた平城宮跡とはまた違った難しさがありました。７月からは東第四堂の北半部の調査が始まっています。南半部の調査では解明できなかった点が明らかになることに期待しています。　　（都城発掘調査部　豊島 直博）

調査区全景（人の立つ場所が東第四堂の柱位置）

東面回廊外側の溝の掘り下げ状況

東第四堂の礎石据付痕跡と足場穴

西大寺旧境内食堂院の調査（平城第404次）

調査区は、平城京右京一条三坊八坪にあたり、764（天平宝字８）年孝謙太上天皇（後の称徳天皇）によって発願された西大寺の北東隅部の食堂院（じきどう）に推定されています。これまでの西大寺食堂院に関連する調査では、食堂と思われる建物や西三坊坊間東小路西側溝、南北に延びる埋甕（うめがめ）遺構などが検出されていますが、多くの部分は未発掘であり、食堂院の範囲や、建物の規模などはわかっていませんでした。今回の調査は、その範囲の北西部分にあたり、食堂院に関する新たな遺構の検出が期待されました。

調査は５月末に開始し、梅雨のシーズンにもかかわらず天候に恵まれ、順調に進みました。６月末に一般公開をおこない、約600名もの方に見ていただくことができました。調査は８月末に終了しました。

検出した主な遺構は、東西棟建物２棟、埋甕遺構などがあり、いずれも奈良時代後半、西大寺創建期と考えられます。南北に並ぶ２棟の建物はいずれも礎石建ての建物です。南側の建物の礎石据え付けの掘形は隅丸方形で、一辺が約２ｍもありました。北側の建物は礎石を据えるための根石を残すものが多く、基壇外装の痕跡と思われる溝も検出しています。さらに、これらの建物は、廊で接続していることもわかりました。

今回発掘した埋甕遺構は、以前奈良市教育委員会が検出した埋甕の続きと考えられ、それらを合わせると、東西４列、南北20列、合計で80基もの甕が並べられていたと考えられます。甕の内部には、おそらく味噌や酢などの食品を貯蔵していたのでしょう。食堂院内に大規模な貯蔵施設が備えられていたことがわかりました。

遺物は、多種多様のものが出土しています。土器は、奈良時代から平安時代前期のものが中心で、土師器、須恵器、施釉陶器などを含んでいます。特に、調査区西側では製塩土器がまとまって出土しました。奈良二彩の盤や鉢も比較的多くみつかっています。その他、奈良時代後半の西大寺所用の軒瓦や、凝灰岩、金属製品なども出土しています。

創建当時の西大寺については、『西大寺資財流記帳』という史料に詳しく書かれています。それによると、食堂院には食堂、檜皮殿、大炊殿（おおい）、厨、倉などの建物があったことがわかります。今回検出した２棟の建物は、これらのいずれかに相当すると思われます。さらに貯蔵施設や井戸といった、食堂院に必要不可欠な施設も検出されており、今後、創建期の西大寺食堂院について、さらには南都の古代寺院の研究をすすめる上で、重要な成果を得ることができました。　（都城発掘調査部　大林 潤）

調査区全景（北西から）

高円宮妃殿下が飛鳥資料館ご訪問

平成18年度全国高校総体アーチェリー競技大会の開会式にご臨席の高円宮妃殿下は、８月３日（木）飛鳥資料館をご訪問になられました。田辺館長、杉山学芸室長がお出迎えし、館長が昨今の高松塚の状況や資料館の概要説明をおこなった後、展示室では館長や室長が石造物や壁画古墳について説明し、地下の特別展示室では加藤主任研究員が十二支像の説明をおこないました。

妃殿下は飛鳥の歴史や壁画古墳の説明に大変ご興味をお持ちになったご様子で、予定時間をかなり過ぎてのご観覧となりました。　（飛鳥資料館）

説明を受けられる高円宮妃殿下（須弥山石前にて）
左は杉山室長、右は田辺館長

海獣葡萄鏡

本年の秋の特別展では海獣葡萄鏡（かいじゅうぶどうきょう）に焦点を当てた展覧会を企画しました。海獣葡萄鏡は高松塚古墳の副葬品として有名になりました。丸い形をした青銅製の鋳造品で、表は磨き上げてあり、裏には中央のつまみである、鈕（ちゅう）を中心に海獣と呼ばれるライオンに似た獣が様々な姿態で表現されます。裏側の文様を内と外に二分割する界圏と呼ばれる円形の突線の外側には、昆虫や鳥を配しています。これらの動物や昆虫の周囲を葡萄の蔓草や房が取り囲みます。

高松塚出土品と同じ文様の海獣葡萄鏡が、西安近郊の墓から698年の紀年を持つ墓誌とともに出土しており、海獣葡萄鏡の時代を知ることができると同時に、高松塚古墳の年代と被葬者の比定に大きな手がかりとなりました。

日本では高松塚古墳以降、いくつかの火葬墓から副葬品としての出土が知られます。また直径６cmほどの小形海獣葡萄鏡が奈良時代に大量に生産され、溝や川などから発見されています。また多くの海獣葡萄鏡で同型鏡が見つかっており、その生産と流通のあり方にも興味が持たれます。鏡の直径は16.8cm。

（飛鳥資料館　杉山 洋）

『発掘調査のてびき-集落遺跡編-』の作成事業

文化庁では、平成16年10月に『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準(報告)』を作成し、発掘調査の基本理念や調査方法の原則についてまとめました。しかし、実際の発掘調査で各現場担当者が適切な作業をおこなうためには、その方法や手順・内容を示したマニュアルが必要です。

そうしたマニュアルとしては、昭和41年に文化庁が刊行した『埋蔵文化財発掘調査の手びき』があり、長い間愛用されてきました。しかし、この40年の間に、発掘調査の方法や技術は大きく進展し、遺構・遺物に関する新知見も急増していることから、この現況に対応し、新技術等の成果をも盛り込み、全国の地方公共団体等が共有し準拠すべき内容を備えた新たな『てびき』の作成が急務となっていました。

こうした状況を踏まえ、文化庁から『てびき』作成事業の委託を受けた奈良文化財研究所では、平成17年度より、この『発掘調査のてびき－集落遺跡編－』(仮題)の作成に各部局横断的な体制で取り組んでいます。

この『てびき』作成の組織は、大学等の学識経験者８名からなる作成委員会の指導・助言のもとに、作業部会が、『てびき』の内容の検討や執筆・編集の実務を担当するという形をとっています。実働部隊である作業部会は、各地域や組織の多様な方法や考え方をできるだけ俎上(そじょう)にのせるようにするため、メンバーの所属地域・組織や専門領域のバランスを考え、文化庁記念物課５名、奈良文化財研究所21名、地方公共団体職員12名で構成されています。

『てびき』作成は、遺跡の７割程度を占める集落遺跡をまず対象とし、その発掘作業に関わる諸事項の検討から始め、現在、各章・節間の内容を調整するため、原稿の分担執筆を開始している段階です。

作業部会はこれまでに５回開催しました。『てびき』の各章・節に盛り込むべき内容の検討にあたっては、竪穴建物、掘立柱建物、溝、記録・写真など項目ごとに分科会を設け、各地における調査例などを叩き台として現状や問題点について討議し、そこで出てきた問題等を全体会議で議論し、共通認識を形成していくという方式をとっています。

また昨年度には、埼玉県内の集落遺跡の発掘現場に立って、そこの調査員をも交え、具体的な調査方法について意見を交わすこともおこないました。

また、各遺構等の用語法や略号については、各地方公共団体が作成している発掘マニュアルや報告書などを参照しながら、全国的な標準化を目指して統一していくという方針で検討作業を進めています。

上記の作業部会においては意見対立が多々ありました。たとえば竪穴建物に関しては、「竪穴建物」と呼ぶか、「竪穴住居」の慣用語を用いるべきか。半地下部分を充填している土の呼称は、「覆土(ふくど)」か、「埋土(うめつち・まいど)」か。埋土内の遺物は、ドット方式で出土位置を記録して取り上げるべきか、基本的には土層ごとに取り上げればよいのか。土層観察には、十字ベルトがよいか、四分法をとるべきか、等々。

現状では、地域や大学・地方公共団体の組織等によって、発掘調査の方法や用語法等に少なからぬ違いがみられます。発掘調査の向上や情報の共有化にとって、用語等は統一されている方が便利ですが、それぞれ慣れ親しんできたものを改めるには抵抗もあって、統一化は容易ではありません。そうした制約を打開して、調査や用語法の標準化をどう進めていくか。作業部会では、毎回こうした課題に取り組み、白熱した議論を展開してきました。そうした議論の積み重ねによって、委員間の相互理解や各種の遺構の認識も深まり、標準化に向けて共通理解を得られるようになってきています。

この『てびき』作成事業は、今年度、集落遺跡発掘調査についての執筆や内容等の検討作業を継続していくとともに、来年１月からは、発掘調査で得られた資料や出土遺物の整理、報告書作成のマニュアル作りを目指した作業部会を立ち上げ、それらの手順や技術・内容等を検討することになっています。

この整理や報告書作成については、発掘現場作業以上に地域差が大きく、『てびき』作成作業は相当な苦労を伴うのではないかと思われます。しかし、2009年３月には、発掘作業部分のマニュアルとあわせて、新たな『発掘調査のてびき』を文化庁から刊行する計画です。時間は限られていますが、発掘調査や資料整理・報告書作成の質の向上や標準化を現実化できる内容の『てびき』が作れるよう、メンバー一同努力していきたいと思っています。

(文化遺産部　山中 敏史)

『黄冶唐三彩の考古新発見』の刊行

2005年３月、中国語版『黄冶窯考古新発見』が刊行され、本年３月、その日本語版『黄冶唐三彩の考古新発見』（奈良文化財研究所史料第73冊）を公刊しました。これは、奈良文化財研究所と中国文物研究所、河南省文物考古研究所との間で実施中の「鞏義市黄冶唐三彩窯跡及び産品に関する共同研究」の研究成果中間報告書の２冊目です。

現在中国では、８ヵ所の唐三彩生産跡が知られるようになりましたが、鞏義市黄冶窯は、1957年に中国で初めて発見された唐三彩の生産跡です。場所は、隋唐の都「洛陽」の東方で、現代の省都「鄭州」との間にあり、北流して黄河に注ぐ黄冶川の両岸に窯跡が営まれています。黄冶窯は、確認されている窯跡の中で、規模が最も大きく、製品内容も豊富で、操業期間の長いことが確かめられています。その産品は中国国内に止まらず、我国を含めた東アジア、東南アジア、西アジア、アフリカ、欧州など広範に運ばれ、それぞれの多彩釉陶器生産にも強い影響を及ぼしています。日本で生産された奈良三彩もその影響下で生まれました。

平城京大安寺跡出土陶枕をはじめとして日本出土の唐三彩の研究を進める中で、その生産地での実態を研究したいとの想いが、黄冶窯の調査研究を進めてきた河南省文物考古研究所をはじめとする中国側の理解を得て、2000年度から５年間の計画でこの共同研究が始まりました。

研究は双方で協議した計画に基づき、まず、黄冶窯跡の分布調査、既出遺物の調査、文献調査、地名・伝承調査など、必要となる基礎的な悉皆調査を進めました。2002年の河南省文物考古研究所他編『鞏義黄冶唐三彩』、2003年の奈良文化財研究所編『鞏義黄冶唐三彩』（奈文研史料第61冊）はその成果の１冊目として、既出の産品を中心とした図録として刊行したものです。

2002年度からは小黄冶地区における窯跡・工房跡の発掘調査を実施し、極めて重要な知見が得られています。この発掘は、黄冶窯における最初の学術調査であり、成果は中国国内のみならず国外においても大きな反響と注目を浴びました。いち早い公表を望む声をうけて、発掘調査の概要と主だった出土遺物を一書にまとめて刊行したものが中国語版『黄冶窯考古新発見』です。

日本語版では2002・2003年度の発掘調査成果と黄冶窯の基礎研究についての中国側研究者による報告を翻訳して掲載するとともに、１冊目と同様に日本の研究者に「黄冶窯とその産品」についてのより詳しい理解を得ることを目指して、日本人向けに編集し直し、図版の個別解説を日本側研究者の観察結果を加えたものとしています。「捨てられた不良品の種類と量」「作品の製作者表示」「ドーム形三叉トチン」など幾つかのテーマで、「コラム」を加えたのも同じ意図からです。また、付録として、中国、日本における唐三彩に関する文献目録と、唐青花・唐三彩窯跡・唐三彩出土遺跡に関する文献一覧を収めるとともに、第Ⅰ期共同研究の歩みを記しています。

共同研究は現在、2005年６月に調印した協議書に基いた第Ⅱ期に入っています。大小黄冶地区の上流、水地河地区に展開する「白河窯」の発掘をおこなうとともに、黄冶窯の産品としての大型俑の発見を目指した調査を継続し、各地出土の関連資料調査を経て、日中両文版の正式報告書刊行を予定しています。

この共同研究は、当初から本研究所の文化遺産部、埋蔵文化財センター、平城宮跡発掘調査部、飛鳥藤原宮跡発掘調査部などに所属する研究者が協同でおこなう「部局を超えたプロジェクト型の共同研究」として実施してきました。今般の奈文研の組織改革では、平城、飛鳥藤原の２つの発掘調査部が統合され、本共同研究の担当が「都城発掘調査部」に移りましたが、この形は継承されます。

１冊目とともに本書が大方の叱正を得て、有意義に利用され、当該研究のより具体的な進展によって、古代都城の研究に資する一石となることを願うものです。　　（都城発掘調査部　西口 壽生）

共同研究の刊行物（上段中文版、下段日文版）

飛鳥資料館のみどころ（13）

展示品解説　その５
「山田寺の磚仏」

飛鳥資料館南東に位置する山田寺は、７世紀半ばに創建され、その当初の東回廊が倒れたまま出土した遺跡として著名ですが、その発掘調査では、金堂や塔内を飾ったと考えられる磚仏（せんぶつ）も多く出土しました。

磚仏は型に粘土を押し当てたものを焼き、金・銀泥や金・銀箔、彩色などを施して仕上げた像のことで、山田寺のものには４種類あります。このうち上下三段、左右四列に如来の坐像が並ぶ「十二尊連坐磚仏」が最も多く出土しました。表面は焼けて荒れているものが多いものの、当初は黒漆塗りの上に金箔貼りで、各尊を区画する突線の交点近くには釘穴が穿（うが）たれています。一部には壁土が融着していたことから、この磚仏は壁に直接打ち付けられていたのでしょう。

これらは塔跡から金堂跡の南にかけて出土し、とくに塔跡中央に集中して出土しました。ただしその出土数からは、塔の初層の内壁全体を埋め尽くすものではなく、一部の壁を飾っていたと考えられます。「十二尊連坐磚仏」は山田寺以外でも、近くは奈良市の西隆寺や西大寺などからも出土しています。しかし、堂内部を飾ったものではなく、僧侶の念持仏や護符として使用されていたと考えられ、なかには廃絶後の山田寺から持ち去ったものが含まれている可能性もあります。

こうした磚仏には、遺構に基づき推定される建物の規模や様式からは窺い知れない堂内の様子を伝える貴重な品となっています。

（飛鳥資料館　清永 洋平）

十二尊連坐磚仏

■　記　録

埋蔵文化財担当者研修

○文化財写真Ⅰ（基礎）課程
平成18年７月10日～26日　　11名

○文化財写真Ⅱ（応用）課程
平成18年７月26日～８月９日　6名

発掘調査・現場一般公開

○平城第404次調査（西大寺旧境内）
平成18年６月30日（金）　　600名

飛鳥資料館春期特別展

○「キトラ古墳と発掘された壁画たち」
平成18年４月14日～６月25日

飛鳥資料館夏期企画展

○「東アジアの十二支像」
平成18年８月１日～９月３日

■お知らせ

公開講演会

○平成18年10月28日（土）午後１時30分～
於：平城宮跡資料館講堂
「明治・大正・昭和の住まいと文化財」
西田 紀子　都城発掘調査部研究員
「木簡調査の100年－全国出土木簡の追跡から」
山本 崇　　都城発掘調査部研究員

平城宮跡歴史文化講座（第１回）
（ＮＰＯ平城宮跡サポートネットワークと共催）

○平成18年10月14日（土）午後１時30分～
於：平城宮跡資料館講堂
「平城京の暮らし－市と交易活動－」
館野 和己　奈良女子大学教授

飛鳥資料館秋期特別展

○展示　「飛鳥の金工　海獣葡萄鏡の諸相」
平成18年10月14日（土）～11月26日（日）

○記念講演会
於：飛鳥資料館講堂
平成18年10月21日（土）
「海獣葡萄鏡について」
杉山 洋　　飛鳥資料館学芸室長
平成18年10月28日（土）
「伯牙弾琴鏡－唐と日本で好まれた鏡－」
植松 勇介　國學院大學日本文化研究所
共同研究員

編集「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2006年９月